

# 日本人学習者のスピーチ不安軽減を目指す ビデオ映像の活用

Reviewing Articles on the Use of Video Recordings to  
Reduce Foreign Language Anxiety in Public Speaking

岡田靖子 澤海崇文 いとうたけひこ

OKADA Yasuko, SAWAUMI Takafumi, ITO Takehiko

# 日本人学習者のスピーチ不安軽減を目指す ビデオ映像の活用

## Reviewing Articles on the Use of Video Recordings to Reduce Foreign Language Anxiety in Public Speaking

岡田靖子 澤海崇文<sup>1</sup> いとうたけひこ<sup>2</sup>

OKADA Yasuko, SAWAUMI Takafumi, ITO Takehiko

**要旨：**日本の若者が英語を身につける必要性を迫られる背景として、急速に進んでいるグローバル化社会における活躍への期待があげられる。本文献レビューの目的は、日本の英語教育でビデオ映像を活用したスピーチ指導の可能性を探索するために、日本の文化的背景が外国語学習に及ぼす影響や、外国語学習者のスピーチ不安に関する文献を検索することである。まず、日本の文化的な特性が教育現場において学習者に与える影響について検討する。つぎに、外国語学習に対する不安に関する研究を総括し、教育現場における学習者の不安を緩和する手段としてビデオ映像の活用による教育効果を考察する。スピーチ指導での学習者ビデオ映像の活用は、観察学習や自己省察に役立つだけでなく、ポジティブな学習体験に結びつくことで、学習者の不安を軽減する可能性が示唆される。

**キーワード：**スピーチ技術、アクティブラーニング、英語教育、日本人学習者、教室学習

**Abstract:** To work in a rapidly globalizing economy and society, young Japanese people are expected to acquire communicative English. This review article aims to explore new directions for using video recordings of students' performances in an English as a foreign language course. It achieves this by examining the educational effects of Japanese cultural characteristics on foreign language learning and foreign language anxiety in speaking. First,

---

1 流通経済大学

2 和光大学

we clarify how Japanese cultural characteristics affect students' classroom learning. Second, we review research on foreign language anxiety, and present an in-depth examination of the educational effects of using students' video-recordings as models to reduce learners' anxiety in the classroom. We suggest that the instructional method of using students' video recordings may help reduce learners' speaking anxiety by providing models for observation and self-reflection, as well as showing the realization of positive learning experiences.

**Keywords:** public speaking skills, active learning, English as a Foreign Language, Japanese learners, classroom learning

## 1. 目的と課題

### 1.1 英語教育における課題

グローバル化が急速に進む経済社会で活躍するために、日本の若者はコミュニケーション手段としての英語力を身につけることが求められている。このような能力を備える人材を育成するために、文部科学省は初等中等教育段階から英語教育を充実させることを目指している<sup>1</sup>。中学校での英語授業は基本的に英語で行うことや、高等学校での授業ではプレゼンテーションやディベートなどの高度な言語活動を取り入れることが期待されている。さらに、平成24年8月には文部科学省の答申内容が公表され、大学教育において能動的な学習者を育成する必要が高まってきた<sup>2</sup>。その2年後には高等学校と大学の接続の実現、さらにはアクティブラーニングの充実が求められるようになり<sup>3</sup>、英語教育においてもアクティブラーニングの概念にもとづいた教育活動が導入されるようになった。このような活動にはグループ討論やプレゼンテーション、プロジェクトを取り入れた学習などが含まれる<sup>4</sup>。英語授業におけるスピーチ指導は、学習者のビデオ映像をモデルとして観察することや、学習者自身のビデオを見ながら自己評価をすることによって、アクティブラーニングに寄与することが示唆されている<sup>5</sup>。しかし、充実した英語教育が実施されたとしても、外国語を使って人前で話すことに対して苦手意識を持つ日本人英語学習者は少なくない<sup>6</sup>。

### 1.2 本研究の目的

本研究の目的は、大学の英語教育においてスピーチ指導を実践することによって、学習者の英

語力の向上や不安の軽減に寄与することを明らかにすることである。またスピーチ指導において学習者のビデオ映像を活用した学習形態が、英語学習に対する動機づけの一助となることを示したい。

### 1.3 本研究の方法

まず、日本の文化的な特性が教育現場において学習者に与える影響について検討する。つづいて、外国語学習に対する不安に関する研究を総括し、教育現場における学習者の不安を緩和する手段としてビデオ映像の活用による教育効果を考察する。最後に、学習者のスピーチ不安を軽減するために、スピーチ指導における学習者のビデオ映像の教育的活用への示唆を論じる。

## 2. 日本の文化的背景と英語教育

### 2.1 文化的背景

日本人の文化的な特性として、集団主義 (collectivism) であることがあげられる<sup>7</sup>。集団主義社会では、個人はその集団における目標を強調する一方、個人の独自性を出すことを避ける傾向がある<sup>8</sup>。さらに、日本のような集団主義社会において、帰属する集団の中で自分の意見や考えを主張することはネガティブな行為としてみなされることもある<sup>9</sup>。日本人の集団主義的な考え方は、教育の実践現場においても見られる。たとえば、教室では学習者は他者や自分が傷つくことを避けるために自己主張を避ける場面がしばしば見受けられる<sup>10</sup>。さらに、日本人は高コンテクスト文化であり<sup>11</sup>、同じことを伝える際に、低コンテクストのように多くの言葉を使わずに、言葉以外を用いて相手に伝えることができる。

このような日本の文化的背景は、多くの日本人が外国語として学習する英語のそれとは大きく異なる。英語が広く使用されているアメリカやカナダ、オーストラリアは個人主義 (individualism) であり<sup>12</sup>、集団より個人の独自性を表示することが求められる<sup>13</sup>。そこで、日本とは異なる文化的背景を持つ言語を駆使して、相手に自分の意見を伝えるためには、英語力を向上させるだけでなく、言語文化的な要因について理解を深め、人前で話すことに対する不安を軽減することが必要である。

### 2.2 外国語学習に対する不安

外国語学習の不安とは「話者が最も自由に操れる言語でないことば、多くの場合習得の途上にあることばを使うときに感じたり、学習するときに経験する不安」<sup>14</sup>である。これまで外国語学習と不安の関係について研究が行われてきた<sup>15</sup>。なかでも、スピーキングと不安の関係について検証したものが多くみられる。まず、アメリカで外国語としてスペイン語を履修している大学生（135名）と高校生（109名）を対象とした研究<sup>16</sup>では、アンケート調査の結果から、学習者は人前で話さなければならないときに一層不安を感じることや、学習者の不安は外国語を話すというよりはコミュニケーション不安（communication apprehension）によるものであること、学習者の自尊心の低さが不安を高めることなどが明らかになった。一方で、日本人の大学生（217名）を対象としたアンケート調査から、学習者は恥をかいたり、他人に自分の英語力を過少評価されたりすることを避ける傾向が示された<sup>17</sup>。これらの分析結果を比較すると、スピーキングに関しては、日本人学習者は他者からの評価を気にすることが窺える。

## 2.3 ビデオ映像を活用したスピーキング指導

### 2.3.1 自己調整学習

最近の英語教育における取り組みとして、英語に対して苦手意識を持つ学習者の意欲を高める指導方法が模索されている。英語力が低い大学生を対象とした研究では自己調整学習<sup>18</sup>のプロセスにもとづき、携帯電話の動画撮影機能の活用によるスピーチ技術の向上について量的および質的分析方法を用いて検討した<sup>19</sup>。その結果、動画撮影機能を取り入れることで、学習者が自身の成長の過程を視覚的・聴覚的の両面からの観察や、自己調整学習のプロセスを繰り返し経験することによるスピーチ技術の向上の可能性があるだけでなく、グループ学習や自己省察・自己評価を取り入れることで、自己調整学習での動機づけの強化になることも示唆された<sup>20</sup>。また、同様の学習者を対象とした研究<sup>21</sup>でも、スピーチ発表を目標とした指導を取り入れた場合、学習者は発音などの新たな知識を身につけることによって英語の理解が深まるだけでなく、英語以外の技術、例えば、表現力やリズム感が上達することによって、自信をもって英語を話すことができるようになることも指摘されている<sup>22</sup>。これらの研究から、日本人学習者、とくに英語力の低い学習者に対してスピーチ指導を実施することは、学習意欲の向上の一助になることが示唆された。

### 2.3.2 観察学習

観察学習理論<sup>23</sup>を取り入れた日本人学習者のスピーチ指導に関する研究<sup>24</sup>では、学習者のビデオ

オ映像をモデルとして視聴させることによる教育的効果が検証された。英語力の異なるグループ（上位グループ・下位グループ）に対して、学習者モデルのビデオ（過去に第一著者が担当した英語力上位のクラスで撮影されたスピーチ）を見せた。モデルとしてビデオを見ることについて自由記述回答を求めたところ、上位グループからは「上手な人の真似をすることは大切だと思うし、見て学ぶことも多い」や「自分のクラス以外も見れたことで、客観的に見つめ直せた」などの回答が寄せられた一方で、下位グループからは「参考にはなったが、過去のスピーチの人がうますぎでうまく活用することができなかった。レベルが違った」などの記述がみられた。それゆえに、学習者の英語レベルに見合ったモデルを提示することの重要性が指摘された。

### 2.3.3 追試研究

先行研究<sup>25</sup>の分析結果を考慮したうえで、英語力上位クラスからだけでなく、下位クラス<sup>26</sup>からも選択されたビデオ映像を用いた追試研究が実施された<sup>27</sup>。英語力が同等の2グループを使った各追試研究では、学習者が原稿（180-200単語）を作成し、その内容を暗記してクラスで発表するという手順であった。スピーチ発表はビデオ撮影され、その映像を視聴しながら自己評価・ピア評価が実施された。自己評価・ピア評価では11項目を使用し、ボイスコントロール（4項目）、ボディランゲージ（4項目）、有効性（3項目）が下位尺度として用いられた。観察学習では、2グループに対して2種類のビデオ映像（英語力上位と下位）を2回目と3回目のスピーチ発表直前のそれぞれの授業で、交代で視聴させた（図1参照）。

グループ（上位モデルを先に見るグループ、下位モデルを先に見るグループ）、スピーチ（1回目、2回目、3回目）を要因とした2×3による分散分析を実施した。その結果、自己評価では全ての追試において有意な差はみられなかったが、追試1<sup>28</sup>と追試2<sup>29</sup>では、下位モデルを先に視聴したグループのほうはピア評価が有意に高くなることが示された。しかし、追試3<sup>30</sup>のピア評価では、追試1や追試2のように一貫した結果が得られなかった。追試研究におけるピア評価の平均値と標準偏差を表1に示す。

次に、全ての追試研究において、ビデオ映像による学習者モデルの活用効果について自由記述回答を実施したところ、全ての追試において上位モデルと下位モデルの役割がそれぞれ異なることが示された。上位モデルはモデルの方が優れている点（例：発音など）を向上させる意識を高め、下位モデルではモデルの弱点に気づくことで、学習者のスピーチ技術の向上に結びつくことが示唆された。全ての追試は教室における実践研究として行われたことから、学習者モデル以外の教育的要因（例えば、スピーチ以外の指導内容）が含まれていることは否定できないだろう。

図1 研究手順 (Okada et al., 2017cより引用)

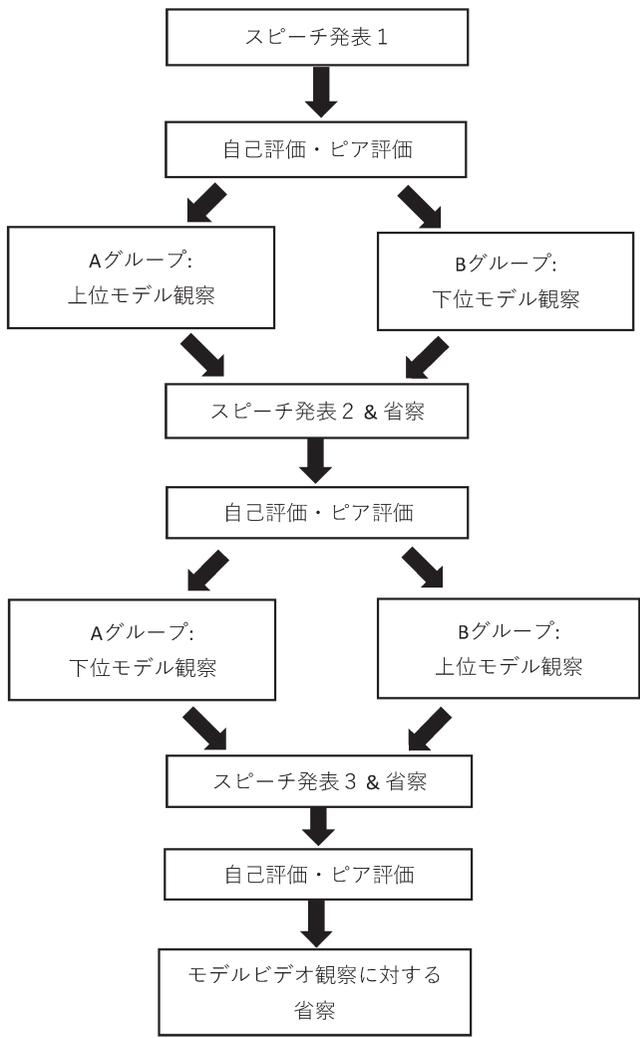


表1 ピア評価の平均値と標準偏差（岡田他、2018）

	Aグループ						Bグループ					
	1回目		2回目		3回目		1回目		2回目		3回目	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
<b>Okada, Sawaumi &amp; Ito (2017c)</b>												
ボイス	3.20	0.25	3.41	0.25	3.21	0.24	3.16	0.27	3.32	0.30	3.50	0.21
ボディ	3.19	0.18	3.37	0.24	3.24	0.22	3.00	0.20	3.19	0.17	3.30	0.19
有効性	3.31	0.21	3.45	0.17	3.42	0.13	3.45	0.06	3.51	0.08	3.65	0.08
<b>Okada, Sawaumi &amp; Ito (2017a)</b>												
ボイス	3.34	0.31	3.28	0.44	3.36	0.25	3.05	0.39	3.13	0.40	3.45	0.22
ボディ	3.34	0.19	3.37	0.20	3.40	0.16	3.07	0.25	3.21	0.29	3.50	0.13
有効性	3.52	0.12	3.35	0.40	3.46	0.09	3.34	0.17	3.37	0.16	3.61	0.11
<b>Okada, Sawaumi &amp; Ito (2017b)</b>												
ボイス	3.49	0.24	3.56	0.22	3.75	0.21	3.55	0.18	3.54	0.17	3.61	0.19
ボディ	3.38	0.17	3.47	0.14	3.67	0.16	3.62	0.09	3.51	0.12	3.67	0.11
有効性	3.56	0.13	3.67	0.09	3.81	0.11	3.75	0.08	3.61	0.11	3.73	0.09

Note.

Aグループは上位モデル・下位モデル、Bグループは下位モデル・上位モデルの順に視聴している。ボイス＝ボイスコントロール、ボディ＝ボディランゲージを示す。

以下は、追試1の自由記述回答からの例である。

一言一言しっかり発音することを心がけ、何日間もかけてスピーチの内容をしっかりと暗記し自信につなげることを目標にした。ネイティブの人の英語のようにスラスラは話すことはできないが、本田圭佑の英語の会見のように、ゆっくりハキハキとならできると思った（Bグループ、男子学生102）。

ビデオ媒体による学習者モデルから学んだ知識を活用しながら、学習者が自己効力感<sup>31</sup>を高める可能性が示唆されている。

### 3. 今後の展望

#### 3.1 ビデオ映像を活用したスピーチ実践

先行研究の結果から、学習者のビデオ映像をスピーチ指導で活用することは、その映像が学習者自身のものであれ、学習者以外のものであれ、日本人英語学習者がスピーチを英語で発表する際に感じる不安を軽減する可能性が考えられる。一つは、学習者自身のビデオ映像の視聴と自己

省察をとおして、自己調整学習のプロセスが学習者の身につく、その結果として自己効力感の向上につながるということがわかっている<sup>32</sup>。自己効力感が高まれば、学習者の英語力だけでなくコミュニケーション能力に対する自信も湧いてくるのではないか。

もう一つは、観察学習の一環としてビデオ映像をモデルとして提示することで、学習者は多くの学びを経験することができる。学習者をモデルとして活用することで社会的比較<sup>33</sup>が行われた結果、学習者はモデルと同じように上手にタスクを遂行することが示唆されている<sup>34</sup>。とくに、大学生は発達段階でみると、自分と類似した他者との比較が多くなる時期でもあることから<sup>35</sup>、母語話者などの学習者といった大きく異なる他者との比較より、自分と類似した他者と比較したほうが自分の能力レベルを知ることができるために、学習者に影響を与えやすいだろう。なかでも、英語学習などの個人差が大きく表れやすい場面においては、モデルと学習者の英語力の差があまりにもかけ離れていると、学習者の動機づけを弱める可能性もある。それゆえに、英語力の差が適切になるよう配慮したうえでモデルを提示する必要があるだろう。ビデオを活用した観察学習が学習者の励みとなり、また自信へと変わり<sup>36</sup>、このようなビデオを視聴した後では、英語を人前で話すことに対する不安が多少なりとも軽減するのではないだろうか。

### 3.2 ポジティブな学習体験

外国語学習に対する不安を軽減するために、学習者に最も必要とされることは、ポジティブな学習体験を増やすことである。学習者は学びの中に楽しさを見出すと、学習到達目標を高く掲げることが可能になる<sup>37</sup>。学習者ビデオを活用したスピーチ指導は、学習者にとって刺激的なものであるかもしれない。学習者自身のビデオを見ながら評価することは気恥ずかしいかもしれない。クラスメート以外の学習者のビデオ映像を見る機会もあまりないだろう。日本人英語学習者、とくに、英語力の低い学習者にとって英語でスピーチをすることは容易ではないが、その指導法にビデオ映像を活用して工夫を加えることによって、学習者は新鮮に感じるかもしれない。追試研究<sup>38</sup>の分析結果が示すように、学習者はビデオ映像によるモデルを活用したスピーチ指導に対して前向きに取り組んでおり、それゆえにこのビデオ媒体を用いた指導法は、学習者にポジティブな学習体験を与えることができると推測される。

これからの英語教育では、学習者の達成目標の志向性を考慮した指導方法を導入していく必要がある<sup>39</sup>。試験で間違いを犯さないことや他の学習者の前で恥をかかないことを重視するといった英語の授業ではなく、学習者が教室で生き生きとしたスピーチやコミュニケーションができるような学習環境を作り出すことで、英語学習を通じたポジティブな経験を学習者に与えることが

可能になる。

### 3.3 おわりに

本研究では、日本の文化的な背景が英語学習者に与える影響を概観し、日本人が英語を人前で話す際に感じるスピーチ不安を軽減するための指導法として、学習者のビデオ映像の活用の効果について論じた。日本人学習者にとって、母語と異なった文化的背景を持つ言語を学ぶことは容易でないかもしれない。しかし、急速に変容しつつある社会に対応できる人材として存在感を発揮するためには、英語で自分の主張を相手に伝える能力を身につけておくことは必須であろう。

英語教育でのスピーチ指導は、ビデオ映像を活用すると学習者が自ら学習することで身につけた能力を使い、自己省察や観察学習をとおして学習への動機づけを強化することにつながる。本研究から、ビデオ映像の活用が外国語学習に対する不安軽減の一助になることは示されたが、今後は、日本と同じような集団主義の国<sup>40</sup>におけるビデオ映像を活用したスピーチ実践が英語学習者にどのような影響を与えるかについて検証してみたい。

## 謝 辞

本研究は科研費(C)15K02730の助成を受けたものである。また、第一著者が清泉女子大学言語研究所の客員所員として活動した研究成果である。

## 注

- 1 文部科学省『グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』2013.  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/\\_icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343704\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343704_01.pdf)(閲覧日2017年12月1日)
- 2 文部科学省『新たな未来を築くための大学教育の質的転換にむけて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～答申』2012.  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf)(閲覧日2017年12月1日)
- 3 文部科学省『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）』2015.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf)(閲覧日2017年12月1日)

- 4 江利川「第6章：大学英語授業での協同学習」『共同学習を取り入れた英語授業のすすめ』大修館書店, 2012, p.146.
- 5 岡田・澤海・いとう「英語授業におけるビデオ映像を活用したアクティブラーニングー展望論文ー」『外国語教育メディア学会関東支部研究紀要』2, 2018, pp.23-37.
- 6 河内「英語学習に対する学習者の不安要因ー専攻、性差、およびその変化ー」『久留米大学外国語教育研究所紀要』23, 2016, pp.15-40.
- 7 土居『甘えの構造』光文堂, 1971, pp.162-164.
- 8 Hofstede, Dimensionalizing cultures: The Hofstede model in context. *Online Reading in Psychology and Culture*, 2(1), 2011, p.11.
- 9 菱田「アクション・リサーチを活用した高等学校における英語プレゼンテーションの学」『川村学園女子大学研究紀要』28(1), 2017, pp.15-31.
- 10 新里・嘉数・上原・島袋「学校経営に生かす社会的スキルの研究Vーアサーション・トレーニング教育のTT授業を通してー」『沖縄県立芸術大学紀要』15, 2007, p.175.
- 11 Hall, E. T. *Beyond Culture*. NY: Anchor Books/Doubleday, 1976, pp.112.
- 12 Hofstede Insights: Country Comparison.  
<https://www.hofstede-insights.com/country-comparison/australia,canada,the-usa/>  
(閲覧日2017年12月5日)
- 13 Hofstede, 前掲書, p.11.
- 14 八島『外国語コミュニケーションの情意と動機：研究と教育の視点』関西大学出版部, 2004, p.31.
- 15 例えば、Horwitz, Horwitz & Cope, Foreign language classroom anxiety. *The Modern Language Journal*, 70(2), 1986, pp.125-132.
- 16 Young, An investigation of students' perspectives on anxiety and speaking. *Foreign Language Annals*, 23(6), 1990, pp.539-553.
- 17 河内, 前掲書, p.33.
- 18 学習は生まれながら身につけている能力ではなく、学習者が自発的に学習することで身に付けるものであるという理論。
- 19 牧野「リメディアル教育対象クラスにおける携帯電話動画撮影機能を利用したスピーチトレーニング実践報告」『Language Education & Technology』51, 2014, pp.297-318.
- 20 牧野, 同書, pp.312-313.
- 21 牧野「英語リメディアル教育におけるスピーキング指導と自己効力感の関係についての一考察」『関西英語教育学会紀要』39, 2016, pp.1-15.

- 22 牧野, 同書, p10.
- 23 Bandura(1971, 1986) が提唱する社会的学習理論。行動の学習は個人の経験に基づいてのみ成り立つだけでなく、個人が他者の行動を観察するでも学ぶことができる理論。
- 24 Okada, et al., Different effects of sample performance observation between high and low proficiency English learners. *The 6th Centre for Language Studies International Conference Proceedings*, 2014, pp.394-413.
- 25 Okada et al., 同書.
- 26 学習者がネガティブな先入観を持たないようにするために、下位クラスからのビデオ映像をモデルとして見せる際には「平均的なモデル」として提示した。
- 27 Okada et al., How do speech model proficiency and viewing order affect Japanese EFL learners' speaking performances? *Paper presented at the Globalization and Localization in Computer-Assisted Language Learning Conference*, Brunei, 2017a; Okada et al., Viewing model speaker videos by proficiency order: Effect on Japanese EFL learners' speaking performances. *Paper presented at the 15th Asia TEFL International Conference and the 64th TEFLIN 2017 International Conference*, Indonesia, 2017b; Okada et al., Effects of observing model video presentations on Japanese EFL Learners' oral performance. *Electronic Journal of Foreign Language Teaching*, 2017c.
- 28 Okada et al. 同書, 2017c.
- 29 Okada et al. 前掲書, 2017a.
- 30 Okada et al. 前掲書, 2017b.
- 31 Bandura, A. (1977) によって提唱された理論の一つ。ある目標を達成するために、自分がその目標を達成できると実感する能力。
- 32 牧野, 前掲書, 2014, p.312.
- 33 ある時点における自分と他者との比較のこと。
- 34 Adams, Modelling success: Enhancing international postgraduate research students' self-efficacy for research seminar presentations. *Higher Education Research and Development*, 23 (2), 2004, p.126.
- 35 Suls & Mullen, From the cradle to the grave: Comparison and self-evaluation across the life-span. In J. Suls(Ed.), *Psychological perspectives on the self, Vol. 1*, pp.97-125. Hillsdale, NJ: Erlbaum, 1982.
- 36 Adam, 前掲書, p.127.
- 37 Dewaele & MacIntyre. The two faces of janus? Anxiety and enjoyment in the foreign language classroom. *Studies in Second Language Learning and Teaching*, 4(2), 2014, pp.237-

274.

- 38 Okada et al., 前掲書, 2017a, 2017b, 2017c.
- 39 岡田・澤海・いとう・藤井. 「達成目標理論研究の概観と英語オーラルプレゼンテーション指導への示唆」『日本大学経済学部研究紀要』82, 2016, pp.59-72.
- 40 例えば、中国や韓国などが挙げられる。Hofstede Insights: Country Comparison.  
<https://www.hofstede-insights.com/country-comparison/south-korea/>(閲覧日2017年12月5日)

#### 参考文献

- Adams, K. Modelling success: Enhancing international postgraduate research students' self-efficacy for research seminar presentations. *Higher Education Research and Development*, 23 (2), 2004, pp.115-130.
- Bandura, A. Analysis of modeling processes. In A. Bandura (Ed.), *Psychological modeling: Conflicting theories*. Chicago: Aldine-Atherton, 1971.
- Bandura, A. (Ed.). *Psychological modeling: Conflicting theories*. NY: Aldine-Atherton, 1971.
- Bandura, A. *Social foundations of thought and action: A social cognitive theory*. NJ: Prentice-Hall, 1986.
- Bandura, A. Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 1977, pp.191-215.
- 土居健郎『甘えの構造』光文堂, 1971.
- Dewaele, J. & MacIntyre, P. D. The two faces of janus? Anxiety and enjoyment in the foreign language classroom. *Studies in Second Language Learning and Teaching*, 4(2), 2014, pp.237-274.
- 江利川春雄『共同学習を取り入れた英語授業のすすめ』大修館書店, 2012.
- 菱田信彦「アクション・リサーチを活用した高等学校における英語プレゼンテーションの学習」『川村学園女子大学研究紀要』28(1), 2017, pp.15-31.
- Hall, E. T. *Beyond culture*, NY: Anchor Books/Doubleday, 1976.
- Hofstede, G. Dimensionalizing Cultures: The Hofstede Model in Context. *Online Readings in Psychology and Culture*, 2(1), 2011.  
<https://doi.org/10.9707/2307-0919.1014>(閲覧日2017年12月1日)
- Horwitz, E. K., Horwitz, M. B., & Cope, J. Foreign Language Classroom Anxiety. *The Modern Language Journal*, 70(2), 1986, pp.125-132.

- 河内千栄子「英語学習に対する学習者の不安要因－専攻、性差、およびその変化－」『久留米大学外国語教育研究所紀要』23, 2016, pp.15-40.
- 牧野眞貴「リメディアル教育対象クラスにおける携帯電話動画撮影機能を利用したスピーチトレーニング実践報告」*Language Education & Technology*, 51, 2014, pp.297-318.
- 牧野眞貴「英語リメディアル教育におけるスピーキング指導と自己効力感の関係についての一考察」『関西英語教育学会紀要』39, 2016, pp.1-15.
- 文部科学省『新たな未来を築くための大学教育の質的転換にむけて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～答申』2012.  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf)(閲覧日2017年12月1日)
- 文部科学省『グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』2013.  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/\\_icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343704\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343704_01.pdf)(閲覧日2017年12月1日)
- 文部科学省『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）』2015.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf)（閲覧日2017年12月1日）
- Okada, Y., Sawaumi, T., and Ito, T. Different effects of sample performance observation between high and low proficiency English learners. *The 6th Centre for Language Studies International Conference Proceedings*, 2014, pp.394-413.  
<http://www.fas.nus.edu.sg/cls/CLaSIC/clasic2014/Proceedings/>(閲覧日2017年12月1日)
- Okada, Y., Sawaumi, T., and Ito, T. How do speech model proficiency and viewing order affect Japanese EFL learners' speaking performances? Paper presented at the Globalization and Localization in Computer-Assisted Language Learning Conference, Brunei, 2017a, September.
- Okada, Y., Sawaumi, T., and Ito, T. Viewing model speaker videos by proficiency order: Effect on Japanese EFL learners' speaking performances. Paper presented at the 15th Asia TEFL International Conference and the 64th TEFLIN 2017 International Conference, Indonesia, 2017b, July.
- Okada, Y., Sawaumi, T., and Ito, T. Effects of observing model video presentations on Japanese EFL Learners' oral performance. *Electronic Journal of Foreign Language Teaching*, 14(2), 2017c, pp.129-144.
- 岡田・澤海・いとう・藤井。「達成目標理論研究の概観と英語オーラルプレゼンテーション指導への示唆」『日本大学経済学部研究紀要』82, 2016, pp.59-72.
- 岡田靖子・澤海崇文・いとうたけひこ「英語授業におけるビデオ映像を活用したアクティブラーニング－展望論文－」『外国語教育メディア学会関東支部研究紀要』2, 2018, pp.23-37.

新里健・嘉数朝子・上原進・島袋有子「学級経営に生かす社会的スキルの研究V：アサーション・トレーニング教育のTT授業を通して」『沖縄県立芸術大学紀要』15, 2007, pp.175-191.

Suls, J., & Mullen, B. From the cradle to the grave: Comparison and self-evaluation across the life-span. In J. Sulz (Ed.), *Psychological perspectives on the self* (Vol. 1, pp. 97-125), Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum, 1983.

八島智子『外国語コミュニケーションの情意と動機：研究と教育の視点』関西大学出版部, 2004.

Young, D. An investigation of students' perspectives on anxiety and speaking. *Foreign Language Annals*, 23(6), 1990, pp. 539-553.